



私は生活つづり方・作文教育（子どもの生活にねざした表現を中心とした教育実践）の研究をしてきました。この話は

潔癖で暴れていたよしとくん

よき生を支える実践に注目していきます。

この連載では、社会の矛盾を乗り越え、子どもたちが安心して過ごせる場所をつくり、ゆたかな学びを生み出している実践に注目し、どうやって困難を乗り越えてきたのかを一緒に考えていきたいと思えます。読後に、「あの子と次の授業でこんなことやってみよう」「朝の集まりでこんなことやってみよう」とみなさんのねがいが広がるといいなあ…。

なお、この連載では、タイトルに「教育実践」という言葉を使っていますが、保育や療育の実践についても取り上げていきます。EDUCATION（教育）の語源や意味の変遷を探している白水浩信さん（北海道大学）は、語源はラテン語の EDUCATIO（養育すること）であり、学校も教えること以上によりよき生（ウェル・ビーイング）の場でなければならぬと主張しています。この連載でも、学校に限らず、子どもや青年のよりよき生を支える実践に注目していきます。

弟が暴れていること、そのことで安心できる時間と空間が家になくなり、弟を責める気持ちを率直に書いています。同

弟が暴れていること、そのことで安心できる時間と空間が家になくなり、弟を責める気持ちを率直に書いています。同

弟が暴れていること、そのことで安心できる時間と空間が家になくなり、弟を責める気持ちを率直に書いています。同

弟が暴れていること、そのことで安心できる時間と空間が家になくなり、弟を責める気持ちを率直に書いています。同

京都の小学校教員・小松伸二さんの2000年代半ばの実践です。「アスペルガーを含めた自閉症スペクトラムの疑い」という診断を受けたよしとくん。2年生の終わりから、学校になかなか行けません。小3・4では4分の3（150日以上）欠席でした。よしとくんが4年生の頃、自傷行為、昼夜逆転、家の壁をなぐる等があり、人に触られると「汚い！ さわられた！」とパニックになっていました。その頃のお姉さんの日記です。

ねがい ひろがる 教育実践



神戸大学
川地亜弥子

かわじ あやこ／研究テーマはわかる・楽しい・感動のある授業づくり、安心できる集団づくりについて。編著に『実践、楽しんでますか？—発達障からみた障害児者のライフステージ』（クリエイツかもがわ）など。

第1回 「むっちゃ楽しい」クラスの中で

この連載で考えていきたいこと

友だちに会いたい、外で遊びたい、みんなと一緒に勉強したい…。昨年2月末の、首相の突然の「全国一斉休校要請」で、多くの子どもたちが、「安心して外に出られない」「友だちに会えない」「やる気・元気がでない」状況にさせられ、子どもの権利の全面的な侵害につながりました。年度の節目にあたる3、4月のとりくみは、子どもにも大人にも特別の意味をもっていました。それも多くの中断させられました。くやしい思いで涙を流した人も少なくなかったでしょう。

私たちは、「一緒に遊びたいな」「私も入りたいな」「話したいな」「助けたいな」という、人に向ける自然な関心と、それをもとにしたふれあい、関わりあいを大事にできました。このむずかしい状況のなかでも、たくさんの人がそうしたりくみに努力しています。その根幹にあるのは「どうせくしかできない」というあきらめではなく、「むずかしいかもしれないけれど…やってみよう！」という、子どもたちへの信頼と、自分たちへの信頼です。

時に、小松さんが担任ならもしかしたら…、という期待も読み取れます。

目標は「むっちゃ楽しいクラス」

お姉さんのねがいが天に通じたのか、小松さんは、よしとくんを5・6年と担任することになりました。小松さんは、学校に来られないことそのものがストレスになっているかもしれないと考え、よしとくんが学校に来るよう誘いました。小松さんとも顔なじみになっていたよしとくんは、初日に登校しました。

この日、わずか30分弱ですが、クラスで集まりました。この学級びらきで、小松さんはみんなに「わいわいにぎやかでむっちゃ楽しいクラスにしよう」と語りかけました。これはよしとくんを意識してのことでした。小松さんは、普段の学級びらきでは、自分から目標を出すことはしません。子どもと一緒に決めていきます。しかしこの年は、担任からのメッセージをはっきり伝えたい、という思いから、提示することにしました。

ほかの子どもたちは驚いていたそうです。多くの場合、教師が示す目標は、「しっかりと協力し、集中するクラス」など